

2015年のロッシーニ音楽祭レポート

ロッシーニ・オペラ・フェスティバル&ザルツブルク音楽祭 2015

水谷 彰良

日本ロッシーニ協会メールマガジン『ガゼッタ』第109号及び第110号とその続き（2015年8月25日&9月5日配信）に掲載した「2015年 ROF（ロッシーニ・オペラ・フェスティバル）レポート（1）（2）」を統合し、写真を追加して日本ロッシーニ協会ホームページに掲載します。（2016年8月）

今年は8月12日に日本を発ち、同日夜にペーザロ入りの予定でしたが、出発時のフライトが1時間45分遅れて乗り継ぎできず、フランクフルト空港で次のフライトを6時間待つはめに。ボローニャからタクシーでペーザロのホテルに着いたのは午前1時半！…タクシー代250ユーロ（約3万4千円）の出費で散々な出だしです。

それはともあれ、翌13日から20日までの8日間にROFでオペラ10回（《泥棒かささぎ》と《新聞》各3回、《幸せな間違い》と《ランスへの旅》各2回）、コンサート4回（《グロリア・ミサ》2回、アマルとペレチャツコのリサイタル）、ウルバニア日帰りツアー、講演会各1回と、合計16の催しを観ました。

いまはまだザルツブルクにいますので、2回に分けて簡略な報告をさせていただきます。



◎ 《泥棒かささぎ》（アドリアティック・アリーナ。8月13、16、19日観劇）

2007年8月ROFのミキエレット演出再演。キャストはニネッタの父親役のエスポージトを除いて総入れ替えですが、狂言回しの少女（=かささぎ）は8年前と同じサンディア・ナガラジャです（インド人ダンサー）。演奏と主な配役は次のとおり。

演出：ダミアノ・ミキエレット（Damiano Michieletto）

ドナート・レンツェッティ（Donato Renzetti）指揮、ボローニャ歌劇場管弦楽団&合唱団
ファブリーツィオ・ヴィングラディート：シモーネ・アルベルギーニ（Simone Alberghini）

ルチーア：テレザ・イエールヴォリーノ（Teresa Iervolino）

ジャンネット：ルネ・バルベラ（René Barbera）

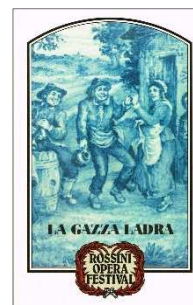
ニネッタ：ニーノ・マチャイゼ（Nino Machaidze）

フェルナンド・ヴィッラベッラ：アレックス・エスポージト（Alex Esposito）

ゴットラルド [代官]：マルコ・ミミカ（Marko Mimica）

ピッポ：レーナ・ベルキナ（Lena Belkina）

イザッコ：マッテオ・マッキオーニ（Matteo Macchioni）……以下省略



8年前の上演がDVDになっていますので、演出に関するコメントを省略して今回の印象を記しますと…。

前回同様に素晴らしいのが、ヴェリズモ風に激しく演じるアレックス・エスポージト。彼だけ今回のキャストに残ったのも頷けます。最終日（19日）の第2幕では、水浸しの床をエスポージトが這いずりまわる際に跳ね飛ばした水しぶきがピットに届くアクシデントもありました（楽器に水のかかったチェリストが、楽器を抱えて出ていきました）。ヒロインのニネッタを歌うニーノ・マチャイゼはベルカント的な味わいが乏しく、観劇した初日（13日）に不満をおぼえましたが、聴くうちに慣れ、最終日はドラマティックな発声歌唱が好印象に転じました。

代官役のバス、マルコ・ミミカも特筆に値します。昨年の若者公演《ランスへの旅》のシドニー卿を歌ったクロアチア人のバスで、歌も演技も完成度が高く、今後もROFで活躍することでしょう。ジャンネット役のテノールはアメリカ人ルネ・バルベラ。2011年モスクワ開催ブラシド・ドミンゴ・オペラリア・コンクールに優勝した新人で今回がROFデビューですが、出てきた瞬間なぜか「顔が三波伸介（初代）みたいだな〜」と思いました。ちょっと癖のある声ですがティンブロー（声質）は良



ROF販売の《泥棒かささぎ》舞台写真

く、アクトも立派です（とくに最終日）。

ルチーア役のテレザ・イエルヴォリーノは名前に聞き覚えがあると思ったら、昨年5月のアルベルト・ゼツダ指揮、東京フィルハーモニー交響楽団演奏会の《ジョヴァンナ・ダルコ》を歌っていました！これが今年26歳とは思えぬ堂々たる声と歌唱です。ファブリーツィオ・ヴィングラディート役のシモーネ・アルベルギーニも味のある演技と表情で好演。残念なのがピッポ役のレーナ・ベルキナ。声量が乏しいのは昨年演じた《パルミラのアウレリアーノ》アルサーチェも同様で、素質はあっても使うのが早すぎるのでは？

指揮のドナート・レンツェッティは、現代のロッシーニ演奏の洗練やスピード感とは異質の「昔の名前で出ています」みたいな指揮者。これは《グローリア・ミサ》でも歴然としていました。とはいえ今回の《泥棒かささぎ》は8年前の上演以上に感銘深く、説得力のある公演となりました（平土間の1、2、3列で観劇）。

◎《新聞》（ロッシーニ劇場。8月14、17、20日観劇）

今回の3演目で唯一の新演出がこの《新聞（ラ・ガゼッタ）》。ROFでは2001年と05年に上演したダリオ・フオ演出のキッチュな舞台が人気を博したので、それを超える演出ができるのだろうかと不安を抱いたのも事実。でもそれは杞憂に終わりました。演奏と主な配役は次のとおり。

演出：マルコ・カルニティ（Marco Carniti）

エンリケ・マツォーラ（Enrique Mazzola）指揮、ボローニャ歌劇場管弦楽団&合唱団

ドン・ボンポーニオ：ニコラ・アライモ（Nicola Alaimo）

リゼッタ：ハスミク・トロシヤン（Hasmik Torosyan）

フィリッポ：ヴィート・プリアンテ（Vito Priante）

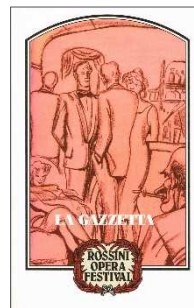
ドラリーチェ：ラッフアエツラ・ルピナッチ（Raffaella Lupinacci）

アンセルモ：ダリオ・シクミリ（Dario Shikhmiri）

アルベルト：マキシム・ミロノフ（Maxim Mironov）

ラ・ローゼ夫人：ホセ・マリア・ロ・モナコ（José Maria Lo Monaco）

トンマジーノ：エルネスト・ラーマ（Ernesto Lama）……以下省略



事前の予想をこれほど見事に覆された上演はありません。カルニティ演出の舞台と歌手全員に加え、喜劇の助演がとてつもなく素晴らしく、手放して絶賛するしかないのです。舞台は背後と両サイドをカーテンで囲み、これが照明でさまざまな色彩に変化します。装置らしい装置は複数に分けてテーブルにも使える長い台、椅子や移動できる階段などが折々に使われるだけ。

でも、ドン・ボンポーニオ役のニコラ・アライモが登場すると、舞台は笑いに包まれます。おデブなアライモにまわりつく下男トンマジーノ（トンマジと呼ばれます）を演じるエルネスト・ラーマが、ストレーレル演出のゴルドーニ『二人の主人を一度に持つと』でアルレッキーノを演じたフェッルッチョ・ソレーリさながらの名優なのです。ラーマはナポリ生まれ、アライモはパレルモ生まれ。共に南部出身ですから、このオペラのナポリ語の妙味も遺憾なく発揮されます。

リゼッタ役のハスミク・トロシヤンは、昨年（2014年）の若者公演《ランスへの旅》のコリンナを歌ったアルメニア人。若く健康的な色気を振りまき、歌も尻上がりに良くなりました（最終日が一番好印象）。それを上回ったのがドラリーチェ役のラッフアエツラ・ルピナッチ。2012年《ランスへの旅》のメリベアーで、翌13年《アルジェのイタリア女》ズルマ、14年《パルミラのアウレリアーノ》プブリアと、ROFで着実に成長しています。

アルベルト役は9年ぶりのROF登場となるマキシム・ミロノフ。9年前の《アルジェのイタリア女》どころか2001年の《ランスへの旅》と風貌や印象がまったく変わっていないのが驚きで、声と歌唱、演技にも余裕があります（個人的には伸び悩みの感もあるのですが…）。その意味ではフィリッポ役のヴィート・プリアンテが実に見事なバリトンで、これがROFデビューとは驚きの逸材です。ナポリ生まれのベルカント歌手でアジリタも抜群ですから、今後ROFに引っぱりだことなるでしょう。



ROF 販売の《新聞》舞台写真

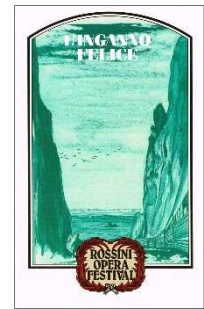
指揮者マツォーラも巧みにオケを牽引し、音楽の魅力を引き出します。なによりアライモとラーマのコンビが最高。アンサンブルの歌手がそれぞれの場所で突っ立って歌ってもラーマが歌手の間を駆け回って笑いを誘うので、音楽的な完璧さを保ちつつ舞台に躍動感が漲っています。第2幕で白鳥の湖を男4人で踊るところも含め、これほど楽しい舞台は稀です。筆者は最初の2回パルコの1階と2階で観劇しましたが、最終日は平土間の最前

列だったので初めから最後まで笑っぱなしでした。

◎《幸せな間違い》(ロッシェニ劇場。8月15、18日観劇)

今回の3演目にオペラ・セーリアはありませんが、1幕ファルスサ《幸せな間違い》は《泥棒かささぎ》と同様、救出劇や感傷劇のオペラ・セミセーリアに属します。演奏と主な配役は次のとおり。

演出：グラハム [グレアム]・ヴィック (Graham Vick)
デニス・ヴラセンコ (Denis Vlasenko) 指揮、G.ロッシェニ交響楽団
イザベッラ・マリアンジェラ・シチーリア (Mariangela Sicilia)
ベルトラント：ヴァシリス・カヴァヤス (Vassilis Kavayas)
オルモンド：ジュリオ・マストロトタロ (Giulio Mastrototaro)
タラボット：カルロ・レポーレ (Carlo Lepore)
バトーネ：ダヴィデ・ルチアーノ (Davide Luciano)



ヴィック演出《幸せな間違い》は1994年の舞台の再演に当たります。筆者は前回も見ましたが、そのときは作品や演出に対する無知無理解もあって「つまらない」と感じました。ところが21年ぶりに見て、その素晴らしさに感銘を受けました。鉱山の入口のある風景がこれ以上ないほどに写實的に再現され、時の移ろいも巧みに視覚化されていたからです。21年前は単に後半の舞台が薄暗く、背後に少しずつ動く客船の模型もあざとく感じたのですが…。《泥棒かささぎ》もそうですが、過去に見たのと現在見るのでは印象が違います。

キャストは1964年生まれのカルロ・レポーレを除いてみな若手。当然と言うべきか、レポーレのタラボットが人間味あふれる表情と歌唱で絶品。ヒロインのイザベッラを歌うマリアンジェラ・シチーリアは今年29歳、2012年の若者公演《ランスへの旅》のコリンナです。実年齢よりも上に見える顔つきで、表情と演技は良いのですが歌唱はまだまだかな、と感じます。



ROF 販売の《幸せな間違い》舞台写真

ベルトラント役のヴァシリス・カヴァヤスは同じ29歳のギリシア人テノール。翌年(2013年)の《ランスへの旅》リーベンスコフです。背が高く、見栄えも良いのですが、ちょっと変な声とあってカーテンコールでブーが飛びました。他の歌手ではバトーネ役のダヴィデ・ルチアーノが抜群に良く、レポーレに次ぐ喝采を浴びました。彼は2012年若者公演のドン・プロフォンドで、翌年《アルジェのイタリア女》のアリ[ハリー]を歌った逸材です。こうしてみると、劇の要のタラボット役以外の大半が過去3年間のアッカデーミア・ロッシニアーナ(ロッシェニ・アカデミー)の出身と判ります(オルモンド役のマストロトタロは今回がROFデビュー)。

指揮はデニス・ヴラセンコ。2008年の若者公演《ランスへの旅》で評価されたロシア人で、2014年藤原歌劇団《オリバー伯爵》をアッレマンディに代わって指揮しています。筆者はとても良いと思いましたが、ロッシェニ交響楽団の水準がイマイチで、18日のカーテンコールではブーが聞こえました。確かに若い歌手に不足もありましたが、それを補う見事な舞台に満足しました。

◎若者公演《ランスへの旅》(ロッシェニ劇場。8月14、17日観劇)

恒例のアッカデーミア・ロッシニアーナ19人の研修生による上演。演出はいつものエミーリオ・サージ。昨年「小旅行 Viaggetto」と題して6~10歳の子供たちを参加させる催しと連動し、若者公演でもフィナーレに子供たちが王冠をつけて手を繋いで平土間の通路を歩くようになりました。筆者は14・17日の両日を見ましたが、17日は十四重唱で会場を後にしました(マチェラータから来た友人と昼食のため)。演奏と配役は次のとおり。

マヌエル・ロペス=ゴメス Manuel López-Gómez 指揮、フィラルモーニカ・ジョアキーノ・ロッシェニ (Filarmonica Gioachino Rossini)
コリンナ：Giuseppina Bridelli (14日)、Federica Di Trapani (17日)
メリベアー侯爵夫人：Cecilia Molinari (14日)、Shirin Eskandani (17日)
フォルヴィル伯爵夫人：Salome Jicia (14日)、長町香里 [Kaori Nagamachi] (17日)
コルテーゼ夫人：Ruth Iniesta (14日)、Leslie Visco (17日)
騎士ベルフィオーレ：Sunnyboy Dladla
リーベンスコフ伯爵：Xiang Xu (14日)、Rubén Pérez Rodríguez (17日)

シドニー卿：Sundet Baigozhin (14日)、Alessandro Abis (17日)
 ドン・プロフォンド：Pablo Ruiz
 トロンボク男爵：Vincenzo Nizzardo
 ドン・アルヴァーロ／アントーニオ：Carlo Checchi
 ドン・プルデンツィオ：Shi Zong
 ドン・ルイジーノ／ゼフィリーノ／ジェルソミーノ：Dangelo Fernando Díaz
 デリア：Carmen Buendía
 マッドレーナ：Shirin Eskandani (14日)、Cecilia Molinari (17日)
 モデステイーナ：長町香里 [Kaori Nagamachi] (14日)、Salome Jicia (17日)



今年は例年になく良いメンバーがいました。指揮者マヌエル・ロペス＝ゴメスはベネズエラ人で、エル・システマの教育で8歳からヴァイオリンを学び、シモン・ボリバル・ユース・オーケストラのメンバーとして来日経験があるそうです。ドゥダメルの下でオペラ指揮者として研鑽を積み、なかなかの逸材です。

歌手で良かったのが14日のコリンナ Giuseppina Bridelli、騎士ベルフィオーレの Sunnyboy Dladla (テノール、南アフリカ人)、14日のシドニー卿 Sundet Baigozhin (バス、カザフスタン人…日本語も少し話せます!)。即戦力との印象です。ロッシェニ向きではないけれど、14日のコルテーゼ夫人 Ruth Iniesta (ソプラノ、スペイン人) も出色でした。毎年そうですが、優れた歌手とそうでない歌手の落差が大きく、なんでこの程度で選ばれたのかと不審に思える人も三分の一ほどいました…この問題は、いずれきちんと書くことにしましょう。



若者公演のカーテンコール

14日の公演後、日本ロッシェニ協会の役員3人(朝岡・金井・私)でゼッダ先生の別宅へお招きにあずかりました(会員の原さんもお誘いして一緒しました)。この日は午後5時から講演会(後述)が予告され、その日の新聞にも載っていましたが、19日に変更されたと教えられ、ゆっくり昼食をいただきました。

◎《グローリア・ミサ》ほか(アドリアティック・アリーナ。8月13、18日鑑賞)

今年の ROF の目玉の一つがフアン・ディエゴ・フローレスの出演する《グローリア・ミサ》ほかの演奏会です。会場は当初予定されたロッシェニ劇場からアドリアティック・アリーナ、指揮者も先月アキレス腱断裂の怪我をしたロベルト・アッパードからドナート・レンツェッティに変更されました。

曲目は《グローリア・ミサ》《オルフェオの死によせるアルモニアの涙》《ディドネの死》の順に予告されましたが、カンタータの順序を変えて演奏したのはフローレスのソロで締め括るための措置で、《グローリア・ミサ》のテノール I と II のアリアもフローレスが一人で歌うなど、“フローレス祭り”の様相を呈しました。

でも珍しく緊張していたみたいで、初日(13日)は「クリステ・エレイソン」の後も立ったまま…歌うところがないのに(笑)…2日目(18日)もアリアの前に袖に引っ込むなど、いつもと様子が違いました。でも彼の熱唱のおかげでつまらない曲が名曲に聴こえました。《ディドネの死》のソリスト、ジェシカ・プラットは2日目の方が良く、フローレスに次ぐ喝采を浴びました。残念なのは、指揮者ドナート・レンツェッティのテンポが間延びしていること。「いまはそういう解釈じゃないんだけどなあ…ゼッダ先生が指揮したらどれほど良かったか!」と思いつつ見えていました。



◎ベルカント・コンサート(1) キアーラ・アマルのリサイタル(オーディトリウム・ペドロッチェ。8月16日 17:00～)

ベルカント・コンサートは三つ行われましたが、21日のニコラ・アライモは聴けませんでした。最初はキアーラ・アマル(Chiara Amarù)…可愛いので以下、アマルちゃんと書きます…のリサイタル(ピアノ伴奏:カルメン・サントーロ Carmen Santoro)。実はいま筆者一押しのロッシェニ歌手がアマルちゃんです。1984年パレルモ生まれだから今年31歳ですが、2011年の ROF デビュー《エジプトのモゼ》アメノフィ役からその初々しくも輝かしい声に惚れました。昨年の《セビーリャの理髪師》ロジーナも素敵でしたが、今年のリサイタルではそれまで知りえなかった彼女の魅力を堪能しました。

曲目は、マスネの「スペインの夜」「アンダルシアの歌」「セビリャーナ」、トマ《ミニョン》から「きみ知るや南の国」、マイアベーア《ユグノー教徒》ユルバンのエールに続いてロッシェニの作品…《アルジェのイタリア女》

イザベッラのカヴァティーナ、《湖の女》マルコムのアリアほかが歌われました。

マスネとトマに濃厚なエロティシズムを漂わせ、マイアベアで洒落な歌の表現を聴かせます。ロッシーニの超絶華麗なアジリタにも驚きました。とりわけアンコールで歌った《ラ・チェネレントラ》ロンド・フィナーレは、「バルトリ以上に見事に歌えます」とアピールするかのように猛烈なスピードと高度なヴァリアツィオーネを駆使し、観客を熱狂させました。

もう言葉にできない素晴らしさ…この日、私はアマルちゃんの熱烈なファンになりました。いや私だけではなく、その場に居合わせた誰もがアマルちゃんに恋したはずです。

◎ベルカント・コンサート (2) オルガ・ペレチャツコのリサイタル (オーディトリウム・ペドロッチェ。8月19日 17:00～)

ベルカント・コンサートの二つ目は大人気のオルガ・ペレチャツコ (Olga Peretyatko) のリサイタル (ピアノ伴奏: ジュリオ・ザッパ Giulio Zappa)。曲目は前半を祖国ロシアの音楽…グリーンカ《ルスランとリュドミラ》のカヴァティーナ、リムスキー=コルサコフの太陽の賛歌など4曲、ラフマニノフ「ヴォカリーズ」など4曲…でまとめ、後半にロッシーニ《ランスへの旅》コリンナの即興歌と《セミラミデ》の「美しい光が」を歌いました。

ロシア人の観客の圧倒的人気と裏腹に、筆者はペレチャツコの声と発声、歌のスタイルがイマイチ好きではありません。この日良かったのもラフマニノフのヴィカリーズなどあまり荒が目立たない楽曲で、コリンナの即興歌は繰り返し部分で歌が行方不明になりました。とはいえ、この日歌われたヴァリアツィオーネは筆者未経験の特殊かつ大胆な歌い替えだったので、その点は大いに感心しました。誰がこんなすごいヴァリアツィオーネを作ったのでしょうか…。

休憩を含めて1時間と告知されながら、アンコール3曲目ですでに1時間半を過ぎています。続いてアドリアティック・アリーナで《泥棒かささぎ》を観るこちらは気が気でないのに、次から次へと花束を受け取ったペレチャツコに演奏を終える気配がありません…オイオイ空気読めよと思いつつ退散しましたが、その後さらに2曲アンコールを歌ったそうです。

◎講演会「ロッシーニと聖なるもの」(サーラ・デッラ・レブプブリカ。8月19日 11:30～)

これは《グローリア・ミサ》《スタバト・マーテル》と関連する講演会で、14日17時からと発表されていたのに当日19日に変更されました(14日の新聞にも誤報が載りました!)。司会は現在のロッシーニ全集出版最高責任者イラーリア・ナリーチで、指揮者ドナート・レンツェッティが《グローリア・ミサ》、ミケーレ・マリオッチェが《スタバト・マーテル》の特色を話しました。

とはいえレンツェッティはロベルト・アッパードの代役でロッシーニ作品の専門家でなく、「間違ったら指摘してね。10日前から準備を始めただけだから」「マリオッチェのことは彼が子供の頃から知ってるよ。ロッシーニのことは彼の方が詳しいんだ」と言う始末。マリオッチェも途中で話がヴェルディのカデンツァに逸れ、「あれ、ぼくは何の話をしてたっけ…」と言って客席から「ロッシーニの《スタバト》のカデンツァ!」と返されました。なんとも締まりのないグズグズの講演会で、筆者は50分ほどで堪忍袋の緒が切れて退席しました。

◎ウルバニア日帰りバスツアー参加 (8月20日)

ROFとは関係ありませんが、8月20日に現地のイサツアー (Esatour) が行ったウルバニア日帰りバスツアーに参加しました。当初8月13、16、20日の3回予定でしたが、催行は20日のみ。その20日も定員50人のところ30人ちょっとしか集まらず、半数近くが日本人でした(筆者同行の郵船トラベル・ツアーの参加で実施に至ったとのこと)。

ウルバニアはペーザロから約40キロ、住民約7000人の小都。最後の偉大なカストラート、ジローラモ・クレシェンティーニ (Girolamo Crescentini, 1762-1846) の出身地で、350席の小さなブラマンテ劇場があります。ツアーはブラマンテ劇場でソプラノとハーブによるロッシーニとクレシェンティーニの作品演奏を聴き、《ギョーム・テル》序曲の間に即興で絵を描くアクション・ペインティングを見て、劇場最上階でビュッフェ・ランチをとりました。食後の陶器工房見



ウルバニアのブラマンテ劇場

学は余計でしたが、とても楽しいひとときを過ごすことができました。

バスツアーから戻り、夜に《新聞》最終日を観劇し、筆者9日間のペーザロ滞在が終わりました。

◎オマケ：ザルツブルク音楽祭の《トリドのイフィジェニー》と《ばらの騎士》観劇（8月22&23日観劇）

旅の後半は郵船トラベル・ツアーの同行講師を務めて21日にザルツブルクに飛び、バルトリ主演のグルック《トリドのイフィジェニー [タウリスのイフィゲニア]》をモーツァルト劇場、R.シュトラウス《ばらの騎士》を祝祭大劇場で観劇しました（22日と23日）。

《トリドのイフィジェニー》は今年のザルツブルク聖霊降臨祭音楽祭の再演です。演出：モーシュ・ライザー & パトリス・コリエ、ディエゴ・ファソリス指揮イ・バロッキステイ、イフィジェニー：チェチーリア・バルトリ、ピラード：ロランド・ヴィラゾン [ピリヤソン]、オレスト：クリストファー・マルトマン、トアス：ミヒャエル・クラウス、ディアース：レベカ・オルヴェラ [オルベラ]。バルトリのプロダクションだから最高水準で当然。ピラード役のヴィラゾン、オレスト役のマルトマンに加えてトアス役クラウスの立派な声に驚きました。バルトリは共演者に負けじと声を張り、高音を叫びがちでしたが、声のパワーでは男性3人に敵いません。伴奏はファソリス指揮の古楽オケで、打楽器群も充実していました。

ライザー／コリエの演出はいつものように20世紀への移し替えて、今回は処刑されようとするオレストを演じるマルトマンを全裸にさせました。股間を両手で隠しただけなので「ポロリ」を心配しましたが、筋肉質の美しい肉体に見惚れました。最後にディアースが金粉ショーみたいな姿で登場し、ユラユラ動いたのは余計でしたね。

《ばらの騎士》は昨年ザルツブルク音楽祭の再演に当たり、NHK・BSでも放送されたのでご覧の方も多いでしょう。演出：ハリー・クプファー、フランツ・ヴェルザー＝メスト指揮ヴィーン・フィル、元帥夫クラッシミラ・ストヤノヴァ、オクタヴィアン：ソフィー・コッホ、オックス男爵：ギンター・グロイスベック。ゾフィー役だけ南アフリカ出身の新人ゴルダ・シュルツに変わりました。

この上演は歌手たちの健闘とヴェルザー＝メスト指揮ヴィーン・フィルの美しい音楽に加え、プロジェクション・マッピングを応用した背景の素晴らしさに圧倒されました。まさに壮観！その迫力とリアル感は見ないと判らないと実感しました。今後はCGクリエイターもオペラの制作に不可欠となりますね。



《トリドのイフィジェニー》のカーテンコール



《ばらの騎士》のカーテンコール

かくして2週間に及んだ今年のペーザロ&ザルツブルクの旅が終わりました（25日帰国）。ROFも例年になく充実した内容で、芸術監督がゼツダ先生からエルネスト・パラシオに代わる来年も大いに期待できます。本号の最後に、2016年ROFの演目と出演者にふれておきましょう。

▼2016年ROFの演目と出演者の速報！▼

会期：2016年8月8～20日

《湖の女》…ダミアノ・ミキエレットの新演出、指揮はミケーレ・マリオッティ。フローレスの出演決定！

《イタリアのトルコ人》…ダヴィデ・リヴェルモレの新演出、指揮はスペランツァ・スカップッチ。ペレチェツコの出演決定！

《バビロニアのチーロ》…2012年リヴェルモレ演出の再演。指揮はヤデル・ビニャミーニ。

会期、演出と指揮者はROFのサイトで正式発表されています。↓

<http://www.rossinioperafestival.it/?IDC=506&ID=684>

フローレスとペレチャツコの出演は、ROF友の会の責任者ドノバンさんのメール（8月25日付）に基づきます。《イタリアのトルコ人》を指揮するスペラン



ツァ・スカップッチ (Speranza Scappucci) は近年脚光を浴びる女性指揮者で、ローマのサンタ・チェチーリア音楽院とジュリアード音楽院で学び、メトロポリタン歌劇場でレヴァイン、ザルツブルクとローマでムーティのアシスタントを務めました。《バビロニアのチーロ》の指揮者ヤデル・ビニャミーニ (Jader Bignamini) は 1976 年クレマ生まれ。クラリネット奏者から指揮に転じ、ロッシーニ指揮者としての評価は未知数です (ヴェルディやブッチーニを振っています)。

ともあれ来年の ROF は、今年以上に盛り上がることでしょう。ROF に終わりなし！